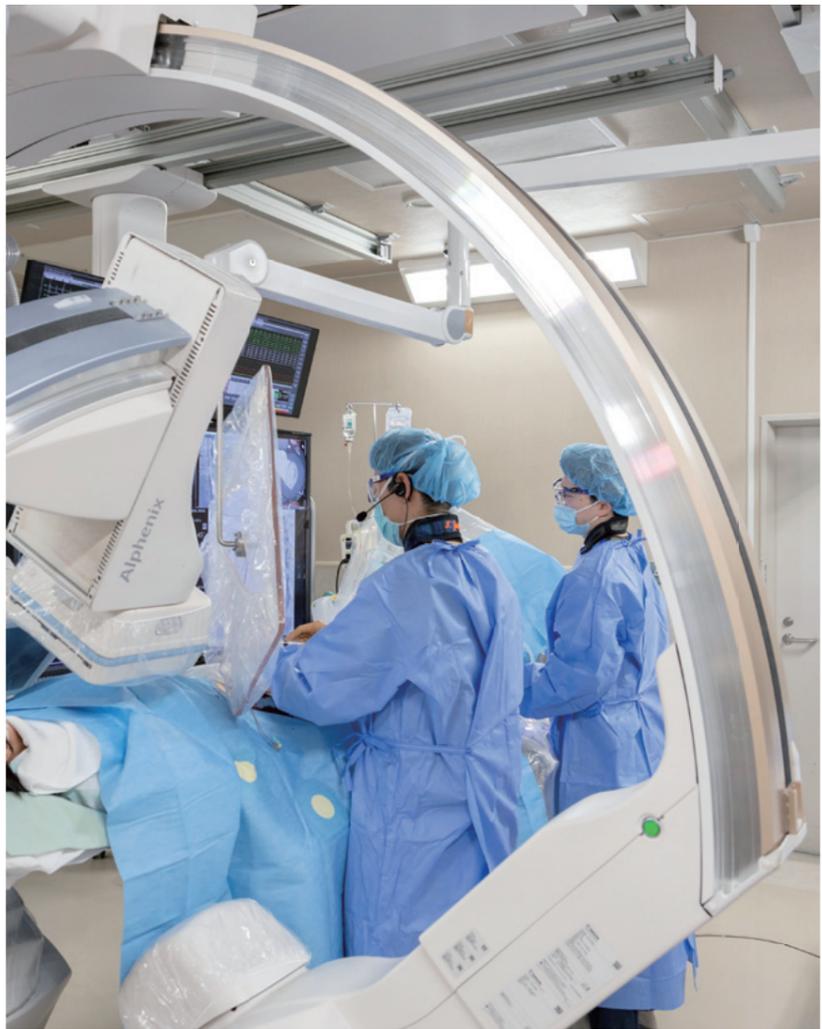


心臓の痛みを感じていませんか？

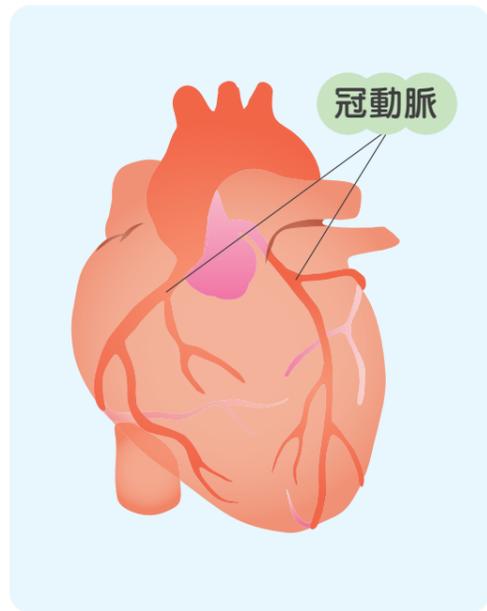


心臓カテーテルセンターでの治療の様子

心臓の痛み

「心臓の痛み」とはどのようなものか、皆さまはご存知でしょうか。典型的には「胸の真ん中あたりが」ぎゅーっと締め付けられるように「数分以上持続する」痛みと言われていますが、必ずしもそうではない場合もあります。特に痛みの場所に関しては、胸ではなく背中や肩、首、時には歯やみぞおち辺りのこともあります。このため、虫歯や胃の痛みなどと間違ってしまうことも少なくありません。

図 1



心臓

狭心症

前述のような痛みを生じる代表的な心臓の病気に狭心症があります。心臓は心筋と呼ばれる筋肉からできており、血液を全身に送り出すポンプの働きをしています。心筋が働くためには酸素が必要ですが、心筋に酸素が運ばれる輸送ルートとしての血管を「冠動脈」と言います。冠動脈は心臓の回りを王冠のようにめぐっています(図1)。この冠動脈の動脈硬化が進んで冠動脈の中に油かす(プラーク)が生じると、冠動脈の空洞が狭くなることで血流が低下し、心筋に必要な酸素が行き渡りにくくなります(図2)。特に運動をして

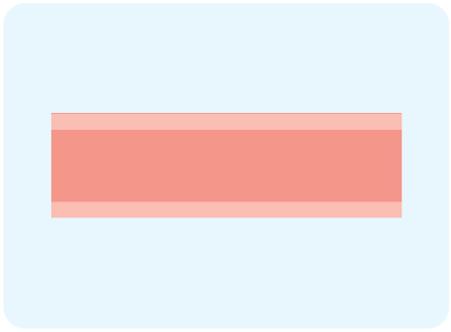
いる時は、全身の筋肉が酸素をより多く必要とします。そのためにポンプの働きをしている心筋はより働く必要があり、心筋自体も酸素をより多く必要とします。その際に冠動脈の狭い箇所がある場合は酸素が十分に運ばれず、心筋が悲鳴を上げて痛みを生じます。これが狭心症です。狭い程度によってどれくらい症状が出るかわ変わってきますが、「少ない運動で痛みが出る」「痛みの頻度が多い」ほど重症である可能性があります。大体の場合は、安静にすることで症状は良くなります。

心筋梗塞

さらに、冠動脈の中の油かすが大きくなって破裂すると、そこに血の塊がついて詰まってしまふことがあります(図3)。詰まってしまうと冠動脈の血流がなくなり、その先の心筋に酸素が送られなくなり、心筋が壊死してしまいます。これが心筋梗塞です。狭心症と違って安静にしても痛みは改善せず持続するようになり、冷や汗や吐き気を伴うこともあります。一刻も早く血流を再開させないと命に関わります。心筋梗塞は狭心症の延長線上にある病気であり、なるべく狭心症のうちに治療を行うことが、命を守ることに繋がります。

予防が大切です！

ただ、それ以上に大事なことは、これらの根本の原因である動脈硬化をいかに防ぐかということです。加齢に伴ってどうしても動脈硬化は進んでしまうのも事実ですが、高血圧、脂質異常症、糖尿病など、いわゆる生活習慣病や、喫煙が動脈硬化を助長させてしまうことは明らかとなっています。普段の食事・運動を見直したり、禁煙を心がけたりすることが重要です。



正常

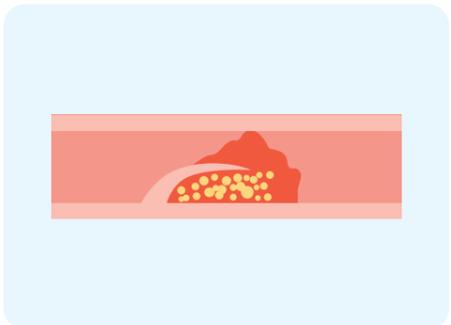
図 2



油かす(プラーク)

動脈硬化による狭心症

図 3



心筋梗塞

循環器内科

吉島 信宏 医師

よしま・のぶひろ
様々なカテーテル治療に取り組んでいます。患者さん一人ひとりに最善の治療を提供できるよう心がけています。

